

心を育てる国語教育の展開

- 人間固有の宗教心の開発をめざして -

渡辺郁夫(修道中学・高等学校教諭)

第1章 人間固有の宗教心

第1節 教育の基盤

本稿は宗教心を育てる国語教育を考えるものだが、それを考えるには当然ながら宗教心が人間固有のものであることが前提となる。「情・意」の教育や徳育は体育や知育に比べて分かりにくい。その理由の一つは、体育や知育には目に見えて分かる測定や評価が可能な能力の表出があるが、「情・意」の教育や徳育にはそのようなものははっきりとは見えにくいという点である。特に徳育はその基盤となる能力を何とするかが分かりにくい。今仮にこれを「徳性」としておこう。

元来教育は宗教や道徳と不可分であり、東洋の場合は儒教と仏教が基になっていたと言ってよい。現在の教育の中心を占めている知育は主流ではなかった。それは徳育の周辺部にあるものに過ぎなかった。なぜなら徳のない知は極めて危険だからである。

儒教は一般には道徳と見なされているが、その根本には古代中国の宗教思想がある。祭天と先祖崇拜の思想である。これは「天」という宇宙の主宰者を祭り、また先祖を祭るものである。孔子を動かしていたものはその「天」の命である「天命」である。「五十にして天命を知る」という「知命」の言葉がそのことをよく表している。このことだけをとっても儒教を単純に道徳と呼ぶのは無理がある。そもそも徳の根本にあるのは宗教であり、徳性は宗教心の表れと私は考える。儒教の場合はこの宗教心は「性善」という形で示され、そこから「仁」を中心とした徳目が表れてくる。

仏教の場合は「仏性」という形でもっとはっきりと宗教心が打ち出される。その仏性の表れ方は仏教内の各宗派によって異なるが、仏性の表れとして「智慧」と「慈悲」を大きな二つの徳目することは、その二つの内のどちらに比重を置くかの違いはあってもほぼ共通である。日本の場合は聖徳太子から仏教が始まったが、太子にとっても仏教は智慧と慈悲の宗教であったと言ってよいだろう。また太子の定めた「十七条憲法」は「篤く三宝(仏法僧)を敬え」という仏教精神と儒教精神の融合であったと言える。このように宗教心を基礎とした上に長らく日本の教育は行われた。

第2節 宗教心を育てる教育

我々が目指すべきは確かな人間観に基づいた「宗教心を育てる教育」であり、私の言う「宗教心を育てる国語教育」はその一環を担うものである。現代日本の混迷は端的に言えば、人々の宗教心が薄れ、それによって徳性も低くなったことが原因である。仏教の立場から言えば、仏道が廃れれば人道

も廃れるのである。仏道が興ることによって人道が興るのである。これが「篤く三宝（仏法僧）を敬え」と言った聖徳太子の見抜いていた点である。

私の場合は仏教に接してきたため、仏教的表現になってしまうが、仏教は各宗派に分かれたことによって総合的宗教の様相を呈し、仏教で説かれることはほぼ他の思想や宗教でも説かれる。仏教的に考えた後で、他の思想や宗教との対応を考えることができる。日本には仏教系の学校が多い。

また宗教人口としてはそれほど多いわけではないが学校としてはキリスト教系の学校も多い。これら宗教系の学校では私の言う「宗教心を育てる教育」は建学の精神としては当然のことだろう。宗教系の私立学校では「宗教心を育てる教育」がまず第一の目標であるべきである。

第2章 宗教心を育てる国語教材のあり方

第1節 国語教育の現場の教材

宗教心を育てる国語教育を展開していくに当たっては教材が必要である。国語の場合は教科書が全てではなく、教科書以外から教材を用いることも可能である。しかしできることなら教科書に入っている教材を用いる方が同僚の国語教師や生徒、保護者の理解も得やすいだろう。教科書の教材を用いて宗教心を育てる国語教育を展開するには、教材の扱いを三種類に分けて考えている。

第2節 宗教心を育てる国語教材の三分類

では具体的にどのような分け方をするのか。まず一つは「直接的教材」である。これを第一類とする。これはその教材で直接に宗教や宗教者、その信者や実践者の言動が描かれたり、作者が宗教信仰の篤い人で、明らかにその宗教思想や信仰が作品に反映していると見なされる作品である。

次に「間接的教材」である。これを第二類とする。これは第一類のように直接に宗教や宗教者、その信者や実践者の言動が描かれたり、作者が宗教信仰の篤い人の作品ではないが、人間や対象への迫り方が真剣な真実探求の姿勢に貫かれているために、宗教的雰囲気が漂う作品となったり、あるいは宗教への接近や宗教の要請を感じさせ、結果的に宗教心の発露となる作品である。これは特定の作家の作品というより、その扱うテーマや対象の扱い方、迫り方が大きく関係してくる。

次に第三類「転換的教材」である。これは作者や作品の当初の意図とは別に、捉え方により宗教的な捉え方が可能になってくるものである。時には非宗教的作品や反宗教的作品までも取り込むことができる。人間や社会の様々な問題を扱うと、結局それを解決するには宗教的見方が必要になる。

第3章 宗教心を育てる国語教材の展開例

第1節 使用した現代文教科書での三分類

現在私が本校で使っている現代文の教科書（大修館書店『精選現代文』）の中から今年度高校二年の現代文の授業で扱った教材について述べたい。

第2節 第一類「直接的教材」、『コルベ神父』(遠藤周作)

『コルベ神父』(遠藤周作)は長崎とアウシュヴィッツを舞台とし、私にとって重要なテーマである「戦争と平和」が背景にある。また長崎は日本では最もカトリックと縁が深く、それが禁教となった江戸時代でも隠れ切支丹がいたことで知られる。コルベ神父が故国に帰ったのは日本の孤児を養う資金集めのためだった。決して個人的動機から帰ったのではない。そこで彼はナチスに捕らえられた。ここでコルベ神父はアウシュヴィッツ収容所で作者の言う「奇蹟」を演じる。コルベ神父は死刑を言い渡された男の身代わりになることを申し出る。男はそのおかげで生き延びることができ、後にコルベ神父の事蹟を世界に伝える伝道者となる。ここで聖書の「友のために自分の命を捨てるほど大きな愛はない。」という言葉伝えたい。何よりもイエス自身の行動が人類に自分の身を捧げる行動であり、それがキリスト教徒の原動力であることも。それはキリスト教に限らず、農村改良に命を捧げた宮沢賢治の仏教の大乗菩薩道の精神と共通するものだ。

身代わりになることを申し出たコルベ神父はアウシュヴィッツの飢餓室に送られた。おそらく見せしめとして長く苦しみを味合わせるためだろう。しかしコルベはなぜか生き続けた。これ自体に奇蹟を見ることもできるだろうが、作者はそれをしない。全てを捧げまかせきった心境がそれを可能にしたのかもしれない。いつまで経っても死なないコルベを医者が注射で殺す。ここで遠藤周作の代表作の一つ、第二次大戦中の日本で起きた九大での医者の生体実験を描いた『海と毒薬』に触れた方がいいだろう。さらには満州での「七三一部隊」にも。医者と生命倫理は現代に続く課題であり、知と徳の関係の問題の一つの典型的な例である。

このコルベ神父の身代わりとなった行為を作者は「奇蹟」と呼ぶ。「我々のできえぬ愛の行為」を「奇蹟」と呼ぶのである。カトリックではルルドの泉の治癒で知られるように超常識的できごととも奇蹟として公認される。それを押さえた上でこの奇蹟を語るのである。作品の終わり近くで長崎でのコルベの働いた印刷所の戸が消滅したことを語る場面があるが、この戸の消滅はかえってコルベ神父の事蹟が不滅のものであることを暗示したものだだろう。物は消えても心は残るのである。ここに作者は永遠の命を見ているのだろう。

最後の場面で神父が身代わりとなるために「おずおずと」看守の前に進み出ることが描かれる。これは作者の想像だが、ここにコルベ神父に弱さや恐怖がなかったわけではないことが描かれる。そのような弱さを抱えた人間でも、さらに言えば弱さを抱えた人間だからこそ信仰によって救われ、人のために命を投げ出させてもらうのだという作者の宗教観が表れているように思う。これは作者のもつ母性的なカトリック信仰が表れているのだろうが、日本の浄土教の精神にも通じるものである。奇蹟を演じたコルベ神父を我々と切り離れた特別の偉大な存在と見ているわけではないのである。こうしてこの作品はあらゆる人の心に訴えかけ、眠っている宗教心を呼び覚ます作品となっている。

第3節 第二類「間接的教材」、『無常ということ』(小林秀雄)

『無常ということ』の場合は冒頭の『一言芳談抄』の引用により、いきなり古典の世界に引きずり込まれるが、この『一言芳談抄』の引用部分が非常にいい。私もこの文章を引用して随想を書いたことがある。ある若い女房が比叡の社で夜更けに鼓を打ちながら「生死無常」のこの世のことはどう

でもよいから、ひたすら「後世をたすけ給へ」と申したという一文である。これは浄土教の原点と言うべきもので、今でも充分通用する考え方である。平安鎌倉の浄土教はこの若い女房の心から出発したと言ってもよい。

小林秀雄はこの文章が心に残っていて、ある時比叡山に行き、うろついていた時、突然この文章が心に浮かび「文の節々が、まるで古びた絵の細勁な描線をたどるように心にしみわたった。」という。この体験を支えているのは「余計なことを何一つ考えなかった」ことであり、それによって「ある満ち足りた時間」、「自分が生きている証拠だけが充満」する時間をもつのである。これが日本文化の基底にあるものだろうと思う。平安鎌倉の時代にはある若い女房にもそれがあつたし、またそれを聞いた人がその話に共感して『一言芳談抄』に収録し、またそれを兼好法師も読んだはずである。その体験を小林秀雄は兼好法師に同化して思い出しているのである。彼の中に兼好法師が生きており、平安鎌倉のある精神が生きているからである。だから「実は巧みに思い出していたのではなかったか。何を。鎌倉時代をか。そうかもしれぬ。そんな気もする。」ということになる。

この心情が私が法然や親鸞のものを読むときにしばしば経験することであり、ここに自分がいるとも、自分の中に親鸞がいるとも思えるのである。「心をむなしくして思い出す」ことが人間を人間にする。そうして「常なるもの」が分かる。同時に「無常」も分かる。これが「常なるものを見失った」現代人への彼のメッセージである。全くこれは彼なりに浄土教を語っていると言ってもいいものである。『一言芳談抄』も浄土教的作品だが、『無常ということ』も浄土教的作品である。

第4節 第三類「転換的教材」、『赤い繭』（安部公房）

安部公房の『赤い繭』は小林秀雄の『無常ということ』の対極にあると言ってもいい作品である。まさに小林秀雄が語っているように「常なるものを見失った」現代人をそのまま描いているような作品である。この状態だけを見れば反宗教的と言ってもよい作品である。しかしよく読めば主人公の若い男が、小林秀雄の引用したひたすら救いを求める若い女房と共通したものをもっていることがわかる。ただ彼は宗教に行き着くことができないでさまよっているだけなのである。まさに作中に述べられているように「さまよえる」男の姿が如実に描かれ、これが現代人の姿である。

この男が抱いている疑問は「なぜ自分の家がないのか」、「なぜ自分の道がないのか」、「なぜ自分は人に受け入れられないのか」、「所有とは何なのか」。そしてそれに答えられない空虚な自分は繭という殻となって消滅してしまう。問い続けることが彼の存在証明であり、答えられない自分は存在していないのと同じである。これらの問いはどのような形を取ろうともすべては仏教で言う「無明」の表れである。だから一つの問いがあるだけでも言える。その根本の問いに答えるのが宗教だが、そこに行き着かない限り、さまようしかないのである。この世界が反転したのが宗教である。親鸞の「悪人正機」の「悪人」の自覚と同様のものをこの男の問いはもっている。これは宗教的段階の前段階として非常に重要な段階である。この問いが深ければ深いほど得るものも大きいだろう。